Lybeaus Desconus 再読
— “Unknown”から“Known”へ —*

Lybeaus Desconus Revisited:
From “Unknown” to “Known”

西 村 秀 夫
(Hideo Nishimura)

1. はじめに

宿の主人に求められて Chaucer が語り始めた *Sir Thopas* が Third Fit（第 3 節）に入ってすぐのところ、すなわち、宿の主人によって話の進行をさえぎられる直前に(1)のスタンザが現れる。このスタンザは Chaucer が同時代の騎士道ロマンスに精通していただけでなく、そこに挙がっている固有名詞から聴衆たちが想起するであろうイメージを Chaucer 自身が十分に承知していたことを示すものと解釈されている。

(1) *Sir Thopas* 897–902

Men speken of romances of prys,
Of Horn child and of Ypotys,
Of Beves and sir Gy,
Of sir Lybeux and Pleyndamour—
But sir Thopas, he bereth the flour
Of roial chivalry!

Horn, Beves, Gy, Lybeux はロマンスの主人公である。このうち、Horn, Beves, Gy を主人公とするロマンスが Chaucer と同時代の Auchinleck 写本に含まれていることはよく知られている。Ypotys は中世で広く知られた伝説の主人公で、皇帝ハドリアヌスに一連の問答を通じてキリスト教の教義を教えたとされる

子どもの名前である。この伝説がロマンス作品と並んで収められた写本がいくつか見られる。Pleyndamour は不詳であるが、Chaucer が Eglamour, Triamour などにヒントを得て作り出した架空の名前という見方が有力である。

British Library, Cotton Caligula A. ii に唯一現存する *Sir Launfal*（写本では *Launfal Miles*）の最後で自ら作者として名乗りを挙げる Thomas Chestre[1] は、同じ写本でこのロマンスの前後に置かれた 2 つのロマンス、*Octovian Imperator* (Southern *Octavian*) および *Lybeaus Desconus* の作者でもあると考えられている。多くの研究者によって'hack-writer'と酷評されてきたこの詩人について、Burrow が 1360 年に賠償金によって解放された人々のリストの中に Chaucer と並んで Thomas de Chestre という名前が見出せることから、Chestre が Chaucer と知り合いであった可能性を指摘している。

(2)　Burrow (1986: 124n3)

Chester (*sic*) was possibly an acquaintance. A Thomas de Chestre appears together with Galfridus Chaucer among those to whose ransoms the king contributed in 1360. Both men had been captured by the French during the campaign of 1359–60.

これに対して Putter は、'Chestre'という姓はありふれたものであり、2 人の Chestre を同一視することは推測の域を出ないと慎重な立場を取っている。

(3)　Putter (2000: 13)

It would be nice to think that this 'Thomas de Chestre' entertained Chaucer with his romances in his period of captivity, though the surname 'Chester' (*sic*) is so common that the identification must remain speculative.

しかし、*Sir Thopas* に Lybeaus の名前が出てくることから考えて、Chaucer と Chestre に直接的なつながりがあった可能性を完全に否定することも難しいであろう。

Lybeaus Desconus のあらすじは次のようなものである。

Gawain の私生児として生まれた主人公は、自分の父親が誰であるかはおろか、自分の本当の名前すら知らされないまま、騎士に叙されることを願って

Arthur 王の宮廷に赴く。その願いは聞き届けられるとともに、Arthur から'The Fair Unknown'(「謎の美少年」)を意味する Lybeaus Desconus という名前を与えられる。ちょうどその時、囚われの身となっている Lady of Sinadoune の救出を求めて侍女 Elene らが Arthur の宮廷にやって来る。Lybeaus は自分がその任に就くことを願い出て許される。以後 Lybeaus は行く手を阻む騎士、巨人などと戦いながら騎士として成長していく。Sinadoune にたどり着いた Lybeaus は家令 (steward) である Lambard と戦って勝ち、続いて Lady of Sinadoune を竜 (worm) の姿に変えて幽閉していた 2 人の妖術師 (clerks of necromancy) を倒す。Lybeaus の口づけにより Lady of Sinadoune は元の姿に戻る。Lybeaus が Lady of Sinadoune を伴って Arthur の元に戻ると Arthur は彼女を妻として Lybeaus に与える。

田舎出の粗野な若者がさまざまな冒険・試練を経て一人前の騎士に成長し、やがて若き貴婦人を妻に娶るというモティーフは *Perceval* をはじめとして中世ロマンスにはしばしば見られるものである。

このロマンスの評価はおしなべて高くない。たいていは次に示すような程度のもので、6000 行あまりのフランス語原典 (*Le Bel Inconnu*) を 2000 行ほどに圧縮している点は評価されるものの、文学的な面で評価できるところはほとんどないというのが大方の一致しているところである。

(4) Newstead (1967: 69–70)

The principal interest of *Libeaus Desconus* lies in its relationship to other forms of the story. Although the English romance is clearly, even briskly, narrated, it displays few literary merits and little imagination. It is not surprising that a sophisticated poet like Chaucer should have found in its pedestrian treatment of romantic adventure the inspiration for some of the most brilliant moment of parody in *Sir Thopas*.

しかしながらこの作品には次に示す 6 つの写本が残っており、広く人気を博したものであったことが窺える[2]。

(5) H: London, Lincoln's Inn, MS Hale 150. Early15c. Sal.

N: Naples, Biblioteca Nazionale MS XIII. B. 29. c. 1457. Dor.

C: London, British Library, Cotton Caligula A.ii, Part I. 15c, 3/4. East Anglia.

L: London, Lambeth Palace, MS 306. 15c, 2/2. London.

A: Oxford, Bodleian Library, Ashmole 61. 15c, 4/4. Lei.

P: London, British Library, Additional MS 27879 (the Percy Folio). c. 1650. NWML.

Lybeaus Desconus の成立年代については14世紀前半から後半までさまざまな説が出されてきたが、最近では14世紀後半とする説が有力のようである[3]。現存する写本はPercy Folio写本を除けばすべて15世紀のものである(H写本は欠落があり不完全)。写本の関係はCに対しLHANPが一つのまとまりであること、さらにその中でANPがまとまりをなしていることが指摘されている[4]。

本稿では近年の中英語ロマンス研究の動向を踏まえつつ、「〈個〉の多様性」という観点から *Lybeaus Desconus* の読み直しを試みる。最もフランス語原典に近いとされる Cotton 写本を基本とするものの、必要に応じて Ashmole 写本、Percy Folio 写本を参照する。

2. *Lybeaus Desconus* における〈個〉の問題

〈個〉を identity と関連付けて考えるとすれば、*Lybeaus Desconus* における〈個〉の問題は以下に示す冒頭のスタンザに集約されていると言える。すなわち、「Gawain 卿を父に持つ Geynlain (Ginglain)という名前の(7-8)、知恵に長け、戦いにおいて勇猛果敢な戦士(5-6)」。

(6) Jhesu Cryst our Sauyour
And hys modyr, þat swete flowr,
Helpe hem at her nede
Þat harkeneþ of a conquerour,
Wys of wytte and whyȝt werrour
And douȝty man yn dede.

Hys name was called Geynleyn,
Be-yete he was of Syr Gaweyn,
Be a forest syde;
Of stouter knyȝt and profytable
Wyth Artour of þe Rounde Table,
Ne herde ye neuer rede. (C 1–12)

以下、'Who is "The Fair Unknown"?' と 'What is "The Fair Unknown"?' という 2 つの問いを手がかりにこのロマンスを検討していく。

2.1 Who is "The Fair Unknown"?

2.1.1 Cotton Caligula A. ii

2.1.1.1 Names

Bliss (2008: 108) は作品の冒頭 72 行で(すなわち Arthur が主人公に Lybeaus Desconus という名前を与えるまで)、名づけに関わる動詞 (name, called, clepede / clepeþ, hyȝt / hatte) が 13 回出現していることを指摘し、作者 Chestre が名前に対して異様な関心を持っていたと述べている。以下に Cotton 写本における主人公の名前の出現状況を示す。

(7) a. G(e)ynleyn 2 exs. (7, 13)

b. Bewfys, Beau-fyȝ 2 exs. (20, 54)

My modyr, yn her game,

Clepede me *Beau-fyȝ*. (C 53–4)

c. Lybeaus Desconus 19 exs.

Now clepeþ hym alle yn vs,

Lybeau Desconus,

For þe loue of me;

Þan may ye wete a-rowe,

Þe Fayre Vn-knowe,

Sertes so hatte he. (C 67–72)

```
                                        Desconus     18
 68 Now clepeþ hym alle yn vs, /Lybeau Desconus, / For þe loue of me; /Þan may ye
181  / Prys yn ech turnement. /Lybeaus Desconus answerede, /ȝet was Y neuer aferde
271 ȝens hym ryȝtte. /Þan seyd Lybeaus Desconus, /Js hys feȝtynge swych v[u]s, / W
295 s armes here. /Well, seyde Lybeaus Desconus, /For loue of swete Jhesus, / Now
316 Wyth well greet raundoun. /Lybeaus Desconus þat tyde /Smot Wylleam yn þe syde
334  art hendy knyȝt. /Þo seyde Lybeau Desconus, /Be þe loue of Jhesus, /Þer-to Y
344  /But Wylleam Selebraunche /Lybeau Desconus gan lonche /Þorȝ-out þat scheld yn
367 e-les yn place. /Þan seyde Lybeaus Desconus, /For loue of swete Jhesus, / Of l
380 , /Þat ys y-clepede yn vs /Lybeaus Desconus, / Vn-knowe of keþ and kende. /Wyl
466  Wyth þe we denkeþ roune! /Lybeaus Desconus þo kryde, /J am redy to ryde / Aȝe
614 prayde swete Jhesus /Helpe Lybeaus Desconus /Þat he wer naȝt y-schent. /Þe red
```

686 Þanne ferst yn court aros /Lybeaus Desconus los / And hys gentyll fame. /Þe Er
749 seyde, Be Jhesus! /Gentyll Lybeaus Desconus: /Þat wer a greet peryle. /Syr Gyf
776 om out of hys hous /He saw Lybeaus Desconus / Com pryky[n]de as pryns yn pryde
905 yffroun [l]e Fludous, /Syr Lybeaus Desconus, /Þys hauk þou hast for-lore! /Þan
907 ast for-lore! /Þan seyde Lybea[u]s Desconus, /Nay, swhych nas neuer myn vus: /
1468 rk of fayr fassoune; /But Lybeauus Desconus, /He hadde wonder of an vus /Þat h
1729 dyȝt to synne! /Þan seyde Lybeauus Desconus, /Be þe grace of Jhesus, /Þat lady
Descon[u]s 1
694 to haue for ay. /Þan seyde Lybeaus Descon[u]s, /Be þe loue of swete Jhesus! /

d. Lybeaus 117 exs.

まず、主人公が生まれたときに付けられた名前 G(e)ynleyn が現れる。母親はこの名で呼ぶことをせず、代わりに Bewfys (handsome son) と呼ぶが、これは母親が「戯れに (yn her game 53)」付けた名前であり、主人公が本当の名前を知らないことに変わりはない。

突然宮廷にやって来て騎士に叙されることを願い出た美しい若者が自分の名前を知らないことに驚いた Arthur は、'The Fair Unknown'を意味する Lybeaus Desconus という名前を与える。しかしながら、作品の中で Lybeaus Desconus というフルネームが出現するのはわずか 19 例で、Lybeaus 単独で用いられた 117 例と比較すると 20%以下である。しかもロマンスの後半部分でフルネームでの出現例はわずか 2 例のみである (1468, 1729)。このことは作品において主人公の騎士としての名声が高まるに伴って Lybeaus が名前として定着・確立し、主人公が'Unknown'であるという意識が薄れたことを示していると考えられよう。

2.1.1.2 Gawain[5]

次に主人公の父親である Gawain について考える。この作品において Gawain は、1)円卓の騎士の一人、2)主人公の血縁者(父親)、という 2 つの側面を持っている。(8)は Lady of Sinadoune の救出に Lybeaus を指名したことに対し侍女 Elene が憤慨し、Arthur に対して猛然と抗議する場面である。ここでは Lancelot, Perceval と並んで Gawain の名前が挙がっている。

(8) Whan þou schalt sende a chyld
Þat ys wytles and wylde
To dele þoȝty dent,

And haste knyȝtes of mayn:
Launcelet, Perceual and *Gaweyn*,
Prys yn ech turnement. (C 175–80)

次に主人公の血縁者としての Gawain に言及している箇所を取り上げる。

(9) a. And hym be-tok *hys fadyr Gaweyn*
For-to teche hym on þe playn
Of ech knyȝtes play. (C 82–4)

b. A knyȝt me hyder gan sende,
Þat ys y-clepede yn vs
Lybeaus Desconus,
Vn-knowe of *keþ and kende*. (C 378–81)

c. A thoȝth Y haue myn herte wyth-jnne
Þat þou art com of *Gawenys kynne*,
Þat ys so stout and gay. (C 1645–7)

d. Wyth hare chauntement
To warm me hadde þey y-went,
Jn wo to welde and wende,
Tyll Y hadde kyste *Gaweyn*,
Eyþer som oþer knyȝt, sertayn,
Þat wer of *hys kende*. (C 2026–31)

Gawain は自分の息子であるとは知らないまま、Arthur に主人公の教育を委ねられる(9a)。

Lybeaus は最初の戦い(行く手を塞ぐ騎士 William Celebronche との決闘)で勝利を収め、William の命を救う条件として Arthur の宮廷に行って事の一部始終を報告するように命じる(9b)。Lybeaus が自分の血縁について言及するのはこの

個所だけである。これ以降も Lybeaus は打ち負かした相手に Arthur の宮廷に行くように命じる場面があるが、自分の血縁に触れることはない。

また、主人公と戦った Lambard が「あなたは Gawain の血筋に連なる人だと思う」と述べ(9c)、救出された Lady of Sinadoune が「Gawain か、その血筋に連なる誰かに口づけするまでは人間の姿に戻れないようにされていた」と述べても(9d)、Lybeaus からの反応はなく、自分の父親が何者かということには、まったく関心がないかのように描かれている。

この作品における Gawain の影の薄さを示す例として、「盾」の扱いに注目したい。主人公が冒険に出発するに際し、Gawain は griffin が描かれた盾を主人公の首に掛ける(10a)。しかしその盾は 2 人の巨人との激しい戦いの際に砕けてしまう。救い出した貴婦人 Violet の父親である Sir Antor から新たな武具を与えられたことで、Gawain を示すトークンはなくなることになる(10b)。

(10) a. Gaweyn, hys owene syre,
Heng abowte hys swyre
A scheld wyth a gryffoun;　　(C 229–31)

b. Þe Erl*, for hys good dede,　　*Sir Antor
Yaf hym ryche wede:
Scheld and armes bryȝt,　　(C 700–2)

作品の冒頭で脚韻語ペアを構成する Geynleyn と Gawain がともに早々に退場したこととも考えあわせると、このロマンスは主人公が父親 Gawain の呪縛から解き放たれ、Lybeaus という新たな〈個〉の確立に向う物語と読むことができるであろう。しかしながら、ロマンスとは通例複数のモティーフが重層的に絡み合うもの—たとえば、主人公の騎士としての成長と父親との再会を描いた *Sir Degare* のように—であることを考えれば、この作品が平板で単調な印象を与えることは否めない。

2.1.2 Ashmole 61

'Who is "The Fair Unknown"?' という問いに対し、Ashmole, Naples, Percy Folio の 3 写本は Cotton 写本と好対照をなす。

主人公と Lady of Sinadoune の婚礼に Lybeaus の母親が現れ、Gawain との再会を果たす(11a)。Lybeaus は Gawain の元に行き、ひざまずいて父の祝福を求める。Gawain は皆の者に息子を Gyngelayn と呼ぶように命じる(11b)。

(11) a. *Syr Lybeus moder* so fre
Come to that mangeré;
Hyr rudd was rede as ryse.
Sche knew Lybeus wele be syght,
And wyst wele anon ryght
That he was of mych pryse.
Sche went to *Syr Gawen*
And seyd, "Withouten leyn,
Thys is owre chyld so fre."
Than was he glad and blyth
And kyssed hyre many a sythe,
And seyd, "That lykes me."
(A 2193–203)

b. He fell on kneys in that stond —
Lybeus knelyd on the ground —
And seyd, "For God all welding,
That made the werld rownd,
Feyr fader, wele be ye fownd!
Blysse me with your blyssyng."
That hend knyght *Gawen*
Blyssed hys son with mayn
And made hym up to stond.
And comandyd knyght and sweyn
To calle hym *Gyngelayn*
That was lorde of lond.
(A 2216–27)

Lybeaus という名前で騎士としての完成への道を歩んできた主人公に対し、ここで突然「リセット」が掛かることになる。Lybeaus とはあくまでも仮の名前であり、主人公が両親と再会し、自分の本当の名前が Gyngelayn であると確認したところから新しい〈個〉(=本来の〈個〉) が始まるということなのであろう。

「別離と再会 (separation and reunion)」は中世ロマンスに頻出するモティーフであるから、この結末は、聴衆 (audience) には特に違和感なく受け入れられたであろう。

Ashmole 61 に含まれるロマンスは、*Sir Isumbras*, *The Erle of Tolous*, *Lybeaus Desconus*, *Sir Cleges*, *Sir Orfeo* の 5 作品であるが、この写本に *Lybeaus Desconus* が含まれていること（しかも、*The Erle of Tolous* と並置されていること）が、この写本を研究する者を大いに悩ませてきた。*Lybeaus Desconus* を除く 4 作品は、「運命による試練を課せられた夫 (the man tried by fate)」あるいは「無実の罪を負わせられた妻 (the calumniated wife)」のいずれか、あるいはその両方をモティーフとして含むのに対し、*Lybeaus Desconus* にはそれが欠けているからである。Blanchfield (1991: 66) は、'scribal-editor' と称されることがあるこの写本の写字生 Rate には宗教的な内容、家族的な内容を好む傾向があり、この作品が「一家再会 (family reunion)」の要素を含む点において、辛うじて他のロマンスと繋がっていると考えている。

2.1.3　Percy Folio

Percy Folio 写本では Lybeaus と Lady of Sinadoune の結婚式の場面が欠けている。このことが編者たちには気に入らないようで、次のように強い調子で注を施している。彼らが中世の写字生であれば大幅な変更を加えているところであろう。

(12)　Hales and Furnivall (1868: 497)

It is so very wrong of the copier or translator to have broken off the story without giving the wedding between Lybius and his love, that I add it here from the three unprinted MSS. as well as the Cotton one.

2.2　What is "The Fair Unknown"?

2.2.1　Lybeaus, wys and whyȝt

物語の冒頭で「知恵に長け、戦いにおいて勇猛果敢な戦士」として描かれる Lybeaus も、Lady of Sinadoune の救出に出発するまでは nys (23), wytles (176)のように正反対に描かれる。

(13) Jhesu Cryst our Sauyour
And hys modyr, þat swete flowr,
Helpe hem at her need
Þat harkeneþ of a conquerour,
Wys of wytte and *whyȝt* werrour
And douȝty man yn dede.
(C 1–6)

Jhesu Cryst owre savyowre
And his moder, that swete flowre,
They sped them in ther nede
That lystyns of a conquerour,
Wytty knyght and gode weryour,
And doughty mane of dede.
(A 1–6)

His moder hym kepte with alle hyr myght
That he shuld se no knyght
Armyd on no maner,
For he was so *savage*
And lyghtly wold outrage
To his felows in fere.
(A 16–21)

And for loue of hys fayr vyys,
Hys modyr clepede hym Bewfys,
And non oþyr name,
And hym-self was full *nys*:
He ne axede naȝt, y-wys,
What he hyȝt, at hys dame.
(C 19–24)

For he was so feyr and *wyse*,
His moder named hym Beuys,
And non other name.
And hymselve was so *nyse*
That askyd never, iwys,
What he hyght of his dame.
(A 25–30)

"I ame a chyld *uncouthe*,
And com nowte of thee soughte;
I wold be made a knyght.
(A 49–51)

Whan þou schalt sende a chyld

That thou wold send a chyld

Þat ys *wytles* and wylde	That is *wytteles* and wyld
To dele þoȝty dent,	To dele mannes dynte,
(C 175–7)	(A 187–9)

ひとたび救出に出発するや、もっぱら wys や whyȝt が Lybeaus に対して用いられていることは(14)からも明らかである[6]。

(14)　Cotton 写本における wys, whyȝt

```
                                    whyȝt      3
  5 keneþ of a conquerour, /Wys of wytte and whyȝt werrour / And douȝty man yn dede. /Hys name
349 herte hyt kaste. /Þanne Lybeaus, wys and whyȝt, /Be-fore hym as a noble knyȝt, / As werrou
934 / As stone yn castell wall; /Þauȝ he wer whyȝt werrour /As Alysander oþer Artour, / Launce

                                    wyȝt       6
196 þat boȝte me dere! /ȝef he þyngyþ þe not wyȝt, /Go gete þe on wher þou myȝt, /Þat be of mo
330 /Be-fore þys ylke day / Ne fond Y non so wyȝt. /Now my ste[de] ys a-go, /Fyȝte we a-fote a
405  squyer as he wore, / And ek a well fayr wyȝt. /But o þyng greuyþ me sore: /Þat he haþ do
442 sle þat knyȝt so yenge. /Her-of wyste no wyȝt /Lybeaus þe yonge knyȝt, / But rod forþ pas
1381 e hem was batayle. /Lybeauus was werrour wyȝt /And smot a strok of myȝt /Þoruȝ gypell, pla
2092 yt was due dette. /Þus Lybeauus, wys and wyȝt, /Wan þat ylke lady bryȝt / Out of þe deuele

                                    wys        3
  5 her nede /Þat harkeneþ of a conquerour, /Wys of wytte and whyȝt werrour / And douȝty man y
349  Jn hys herte hyt kaste. /Þanne Lybeaus, wys and whyȝt, /Be-fore hym as a noble knyȝt, / A
2092 , / As hyt was due dette. /Þus Lybeauus, wys and wyȝt, /Wan þat ylke lady bryȝt / Out of þ
```

また wys and wyȝt, whyȝt werrour, wys of wytet などの頭韻句が多用されていることも Cotton 写本の特徴として指摘できるであろう。

これに対し Ashmole 写本では wyse と nyse が脚韻語ペアとして用いられている(25, 28)。また(15)からは、主人公を形容する wys が 73 行目以降現れていないこと、/w/を含む頭韻句が Cotton 写本に比べて少ないことが分かる。逆に Ashmole 写本では、savage (19), uncouthe[7] (49)のように Cotton 写本にはない形容詞が見られる。A 16–21 や A 49–51 は Lambeth 写本以下に共通で、Cotton 写本と Lambeth 写本他の共通の典拠に含まれていたと考えられる。Mills (1969: 9–11) は Cotton 写本における欠落は不注意によるもの、意図的なもの、両方の可能性があることを指摘しているが、もしもこれらの箇所が意図的な省略であったならば、それは Cotton 写本の写字生が首尾一貫した主人公像を作り出そうとした結果と考えられるのではなかろうか。

(15) Ashmole 写本における wys, wyght

wyght 7

167 rays yow of a knyght /That in werre ware wyght / To wyne hyr with honour. /Up sterte the y
232 bought me dere, /If thou thinke not hym wyght, /Get thee another were thou myght / That i
366 fay, /Never or this dey / Fonde I non so wyght. /Now my stede is away; /Fyght on fote, I t
387 t /Defendyd hym anon ryght, / As waryour wyght and sle. /Barbe and crest doun ryght /He ma
469 be doubull nayle. /Hereof wyst not that wyght, /Libeus, that jentyll knyght; / He rod for
527 rikyd his stede that tyde / Egyr as lyon wyght. /He seyd to Syr Libeus anon, /Syr knyght,
1480 ys held bateyle. /Syr Libeus was weryour wyght /And gane strokys of myght / Throught plate

wyghter 1

993 yffe hym an evyll falle, /Thoffe he were wyghter /Than Alysander or Arthour, / Lanslate or

wyse 4

25 chyld and dere. /For he was so feyr and wyse, /His moder named hym Beuys, / And non other
72 not what thou hyght, / And so feyre and wyse! /I schall hym gyffe a name /Amonge you all
192 mayn, /Persyvall and Ser Gawayn, / Full wyse in tournament. /The duerfe with grete errour
641 uth his craft, / And rode both ryght and wyse. /To fyght with them in same /It was no chyl

2.2.2 A knight full tame

Cotton 写本および Ashmole 写本において、主人公が最初に出会う騎士は立派な武具に身を固めてはいるものの、戦いに敗れて絶命している(主人公はその騎士から武具を奪い取って身に着ける)。それに対し Percy Folio 写本では、主人公が騎士を殺害して武具を奪い取る。これは若き主人公の粗野な性格を際立たせるための書き換えと考えてよいであろう[8]。

(16) a. He fond a knyȝt whar he lay,
Jn armes þat wer stout and gay,
J-sclayne and made full tame. (C 28–30)

b. & as he went ouer the Lay,
he spyed a knight was stout & gay,
that soone he made ffull tame. (P 34–6)

2.2.3 Beheading of Iron

最後に、どちらかと言えば単純で奥行きがある人物としては描かれていない主人公の内面を垣間見させる場面を取り上げる。

主人公はLady of Sinadouneを妖術により竜の姿に変えたMabounとIrainの兄弟と戦って Maboun は殺したものの Irain は負傷させただけで取り逃がす。Maboun を仕留めた後、Irain にとどめを刺そうと周辺を捜し回るがその姿を見つけることができない。その時の主人公の不安な心が Cotton 写本では(17)のように描かれている。Lady of Sinadoune から兄弟は二人とも殺されたと言われているにも関わらず[9]、Lybeaus は Irain には傷を負わせただけで息の根は止めていないという思いが付きまとっているかのようである。

(17) And whanne he ne fond hym noȝt
He held hym-self be-cauȝt
And gan to syke sare,
And seyde, yn word and þouȝt,
'Þys wyll be sore a-bouȝt
Þat he ys þus fram me y-fare!'
On kne hym sette þat gentyll knyȝt,
And prayde to Marie bryȝt
Keuere hym of hys *care*. (C 1975–83)

But euer he dradde Yrayn,
For he was naȝt y-slayn:
Wyth speche he wold hym spylle. (C 2041–3)

これに対して Ashmole 写本では主人公が不安に思うだけでなく、Irain を捜し出して首をはねるところまで描いている[10]。

(18) And when he myght not fynd Irain,
He yede agene serteyn
And he syghed full sore.
And seyd in dede and thought,
"It wyll be dere bought
That he is fro me fare,

For he wyll with sorsery
Do me grete turmentry
　And that is my moste *care*."
He satte full styll and thought
What he best do mought;
　Of blys he was full *bare*.　　(A 2036–47)

Syr Lybeus, the knyght gode,
Into the castell yode
　To seke after Irain.
He lokyd into the chambour
Ther he was in towre,
　And ther sone he hym wane.
He went into the towre
And in that ilke chambour
　He saw Irain that man.
He drew hys suerd with myght
And smote of hys hede with ryght,
　For soth, of Irain than.　　(A 2108–19)

この点、Percy Folio 写本は明快である。Lybeaus は Irain（写本では Iron となっている）を取り逃がしたことを心配する間もなく、ただちに捜しに出かける。Lybeaus はいとも簡単に彼を発見し全速力で馬を駆ってあっという間にその首をはねる。主人公の心配は Lady of Sinadoune の姿が見えないことに移る（Percy Folio 写本ではまだ竜の姿に変えられたままである）[11]。

(19) as he stood, & him bethought
that itt wold be deere bought
　that he was ffrom him fare,
ffor he wold with sorcerye
doe much tormentrye,

& that was much care.
he tooke his sword hastilye,
& rode vpon a hill hye,
& looked round about.
then he was ware of [a] valley;
thitherward he tooke the way
as a stern Knight and stout. (P 2095–106)

as he rode by a riuer side
he was ware of him that tyde
vpon the riuer brimm:
He rode to him ffull hott,
& of his head he smote,
ffast by the Chinn;
& when he had him slaine,
ffast hee tooke the way againe
for to haue that lady gent.
as soone as he did thither come,
of his horsse he light downe,
and into the hall hee went (P 2107–18)

& sought that ladye ffaire and hend,
but he cold her not find;
therfor he sighed ffull sore.
still he sate mourni[n]g
ffor that Ladye ffaire & young;
for her was all his *care*;
he ne wist what he doe might;
but still he sate, & sore he sight,
of Ioy hee was ffull *bare*. (P 2107–27)

この箇所では Cotton 写本における care (1983)、Ashmole 写本における care: bare (2044, 2047)の脚韻語をそのまま保ったまま話の書き換えが行われている。

3. おわりに

Lybeaus Desconus の評価は高いとは言えないのであるが、〈個〉という切り口から見た場合には主人公の成長、名前の定着、一家再会などの点においてそれぞれの写本にそれなりの一貫性が見いだされることが明らかになった。写本間の相違は「〈個〉の多様化」の表れと捉えることができるであろう。さらにそれはこの作品を受容する側の多様化(嗜好の変化、時代の風潮など)を反映するものと考えることができよう[12]。

Lybeaus Desconus は一人の若者が騎士として徐々に完成に向かう物語である。これに対し *Sir Thopas* は一人の騎士が徐々に解体されていく物語と読むことができる[13]。Chaucer が *Sir Thopas* 900 行で *Lybeaus Desconus* に言及したのは、数あるロマンス作品の中の任意の一つとしてではなく、何らかの意図があってのことであろう。この点については今後の課題としたい。

注

* 本稿は、日本英文学会第 83 回全国大会(2011 年 5 月 21–22 日　北九州市立大学)におけるシンポジウム「中世ロマンスにおける〈個〉の多様性」において「"Unknown"から"Known"へ—*Lybeaus Desconus* 再読—」という題目で口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

1. *Sir Launfal* (*Launfal Miles*), 1039–41
   Thomas Chestre made þys tale
   Of þe noble knyȝt Syr Launfale,
   Good of chyualrye:
2. 各写本の作成年代および作成地は Purdie (2008: 211) による。
3. Purdie (2008: 211) は'Before *c.* 1380'としている。
4. Mills (1969: 14–16) 参照。
5. この作品において Gawain の名前は 7 回現れる (Gaweyn: 8, 82, 179, 218, 229, 2029;

Gawenys: 1646)。

6. Lybeaus の形容と無関係な行には網掛けを施してある。(15) も同様。
7. Shuffleton (2008: 113) はこの語に　'unknown (uncivilized)' と注を付けている。
8. Rogers (1991: 52) 参照。
9. Þou hast y-slawe nouþe
   Two clerkes kouþe:　　(C 2020–1)
10. Ashmole 写本では(18)の 2 つの引用の間に Lady of Sinadoune の次の発話があり、物語の展開に混乱が生じている。
    "Thow hast sleyn, for sothe,
    The clerkys that well couthe
    　Of sorcery be the fend.　　(A 2084–6)
11. Mills (2009: 86–8) も参照。
12. 引用(12)に挙げた Percy Folio 写本の編者たちの意見はその一例である。
13. Nakao (2013) 参照。

テキスト

Benson, Larry D. gen. ed. 1987. *The Riverside Chaucer.* 3rd edn. Boston: Houghton Mifflin Company.

Bliss, A. J. ed. 1960. *Thomas Chestre: Sir Launfal*. London and Edinburgh: Thomas Nelsons and Sons.

Hales, John W. and F. J. Furnivall. eds. 1868. *Bishop Percy's Folio Manuscript*, II. London: N. Trübner.

Mills, Maldwyn. ed. 1969. *Lybeaus Desconus*. EETS OS 261. London: Oxford University Press.

Shuffelton, George. ed. 2008. *Codex Ashmole 61: A Compilation of Popular Middle English Verse.* TEAMS Middle English Texts Series. Kalamazoo: Western Michigan University.

参考文献

Blanchfield, Lynne S. 1991. "The Romance in Ashmole 61: An Idiosyncratic Scribe." In Mills, Maldwyn *et al*. eds. *Romance in Medieval England*. Cambridge D. S. Brewer, 65–87.

Bliss, Jane. 2008. *Naming and Namelessness in Medieval Romance*. Cambridge: D. S. Brewer.

Burrow, J. A. 1986. "The Canterbury Tales I: Romance." In Boitani, Piero and Jill Mann eds. *The Cambridge Chaucer Companion*. Cambridge: Cambridge University Press, 109–24.

Mills, Maldwyn. 2009. "The Percy Folio Text of *Lybius Disconius.*" 渡部眞一郎・細谷行輝編『英語フィロロジーとコーパス研究—今井光規教授古希記念論文集—』東京：松柏社, 79–92.

Nakao, Yoshiyuki. 2013. "Progressive Diminution in 'Sir Thopas.'" In Iyeiri, Yoko and Yoshiyuki Nakao eds. *Chaucer's Language: Cognitive Perspectives*. Osaka: Osaka Books, 47–77.

Newstead, Helaine. 1967. "Arthurian Legends." In Severs, J. Burke gen. ed. *A Manual of the Writings in Middle English 1050–1500.* Fascicule I. Romances. New Haven: The Connecticut Academy of Arts and Sciences, 38–79.

Purdie, Rhiannon. 2008. *Anglicising Romance: Tail-Rhyme and Genre in Medieval English Literature.* Cambridge: D. S. Brewer.

Putter, Ad. 2000. "A Historical Introduction." In Putter, Ad and Jane Gilbert, eds. *The Spirit of Medieval English Popular Romance*. Harlow: Longman, 1–15.

Rogers, Gillian. 1991. "The Percy Folio Manuscript Revisited." In Mills, Maldwyn *et al*. eds. *Romance in Medieval England*. Cambridge: D. S. Brewer, 39–64.